

野鳥 会報

No.78 2014年 10月発行

日本野鳥の会新潟県

鳥のいる風景 クマタカ *SPizaetus nipalensis*



クマタカはイヌワシと並んで国内最大級の猛禽である。クマタカの「クマ」とは、大きさと力強さを表すことからきているとされ、また、特徴的な頭部の冠羽から「角鷹：クマタカ」と呼ばれているという説もある。イヌワシに比べ翼さは短い幅が広い。これは、樹林の中を巧みに飛翔したり、瞬発的にスピードを出したりセーブしたりするのに都合よい構造になっている。育雛期に比較的多くのリスが巣に持ち込まれることからもうなづけられ、森の中を自在に飛びながら獲物を捕らえるクマタカの姿を垣間みることができる。育雛期には他にアオダイショウ、ヤマカガシ、マムシなどのヘビ類が運ばれることが多く、タヌキやテン、ノウサギ（いずれも幼獣）が獲りの対象になっ

た。♂成鳥は、一年を通して同じトリトリー内に留まっているが、♀個体は遠出することが多い（一例だが、営巣谷から直線で約20km離れた場所で確認されたことがあった）。行動圏は、400～1000 m級の尾根が連なる山稜に溪谷と溪流等が流れる谷地形のエリアである。日本におけるクマタカの最小推定個体数は、約1,800羽とみられ、環境省と新潟県のレッドリストでは、絶滅危惧ⅠBに選定されている（近い将来において野生での絶滅のおそれが高くなっている種）

※ 写真解説～営巣谷から上昇気流に乗って悠々と舞い上がる♂成鳥

（写真、文：渡部 通）

小千谷市山谷薬師峠における鳥類センサス方法について

小千谷市 中山 正 則

鳥類研究をする上で、鳥類個体数・鳥類群集のデータ把握の基本となる調査方法の選定は極めて重要である。これまで、ラインセンサス法が普通に行われてきたが、環境省自然環境局生物多様センターの調査委託を受けて、日本野鳥の会が、2006年と、2009年に実施したモニタリング鳥類調査では、これまでの調査法ラインセンサス法に変え点センサス法で行っている。ラインセンサス法と点センサス法とでは、データ集積に差異があるのかを解明するために、この度調査を行った。

調査地概要

調査地は、小千谷市市街地から北西5km程に位置している(37°20'N、138°45'E)。小千谷市山谷地区にあり、通称薬師峠と言っている(図1)。



図1. 調査地位置図

小千谷市と長岡市(旧小国町)との境にあり、標高250m程の低山帯である(高所で280mくらい)。小千谷市側の近くには、小千谷カントリーゴルフ場がある。周囲の環境は、落葉広葉樹が優占する森林帯である。林相は、コナラ二次林の代償植生で、一部スギの植林地となっている。二次林の植生は、高木相としてコナラ・ホオノキ・マルバアオダモ・アカメイタヤ・アカマツなど、低木相としてヤマウルシ・リョウブ・エゴノキ・ユ

キツバキ・ヤマツツジなどである。地質学的には、第三紀魚沼群の丘陵地である。



確認された鳥類 ヤブサメ

調査方法

2013年5月16日から6月26日の間に、ラインセンサス法(ロードサイド100m範囲)、点

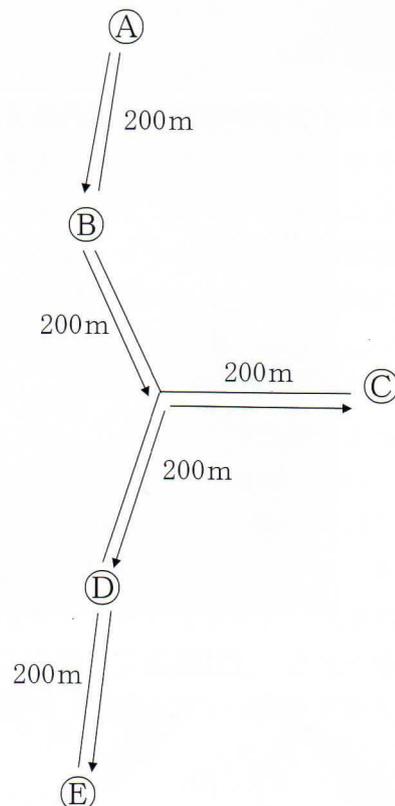


図2. 調査地点センサス及びコース



図3. 調査値の環境

ンサス法（半径 100m 範囲）行った。7月 は、幼鳥が混じるため除いた。点センサスは A B C D E の 5 箇所の調査ポイントを設定、A B 間は 200 m、B C 間は 400 m、C D 間は 400 m、D E 間は、200 m とした。調査時間は、1 ポイント 5 分間とした。ラインセンサスは、点センサスと同上のコースを取った（図 2）。調査距離は 1 km である（コースが往復する所は、往のみをカウント）。調査時間は 1 時間とし、調査の歩行速度は、1 km / 1 h とした。より精度の高いデータを得る（データ間の誤差を少なくする）ために、調査はまず 5 月 16 日にラインセンサス法で、翌 17 日に点センサス法でと以後交互に行った（1 回 / 1 日）。調査日も集中して行った。早朝の調査を基本とし、調査開始時刻は概ね午前 4 時とした。

結果と考察

5 月 16 日（8 回）から 31 日と 5 月 16 日から 6 月 26 日（19 回）の調査結果に基づき点センサスとラインセンサスを解析した。解析は、Wilcoxon 検定（マン・ホイットニーの U 検定と同等）を使用した。以下これによる結果解析と考察である。個体出現しなかった日は、0 と解



確認された鳥類 キビタキ

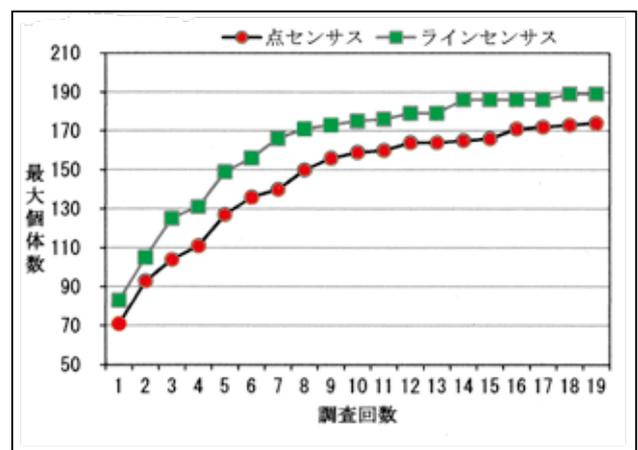


図4. 点センサスとラインセンサスによる各調査回数までの最大個体数の全種の総計

表1. 5月16日から31日及び5月16日から6月26日の点センサスとラインセンサスの解析結果

No.	種名	5月16日から31日 (8回)			5月16日から7月26日 (19回)		
		8回までの最大個体数		Wilcoxon検定	19回までの最大個体数		Wilcoxon検定
		点センサス	ラインセンサス	p値 (Prob> Z)	点センサス	ラインセンサス	p値 (Prob> Z)
1	ヤマトリ	0	2	n. s.	0	2	n. s.
2	カルガモ	0	1	n. s.	0	1	n. s.
3	キジバト	5	8	n. s.	5	8	n. s.
4	アオバト	2	10	n. s.	7	10	P<0.05
5	アオサギ	0	2	n. s.	0	2	n. s.
6	ホトギス	7	4	P<0.05	9	6	P<0.05
7	ツツドリ	2	2	n. s.	2	2	n. s.
8	カッコウ	4	3	n. s.	4	3	n. s.
9	トビ	1	0	n. s.	1	0	n. s.
10	ツミ	2	0	n. s.	2	0	n. s.
11	サシバ	1	1	n. s.	1	1	P<0.05
12	アカショウビン	2	1	n. s.	2	1	n. s.
13	コゲラ	2	2	n. s.	2	2	n. s.
14	アオゲラ	4	6	n. s.	4	6	n. s.
15	サンショウクイ	2	3	n. s.	2	3	n. s.
16	サンコウチョウ	0	1	n. s.	1	1	n. s.
17	チロモズ	1	0	n. s.	1	1	n. s.
18	モズ	0	0	—	1	0	n. s.
19	カケス	2	1	n. s.	2	1	n. s.
20	ハシボソガラス	1	6	n. s.	2	6	n. s.
21	ハシブトガラス	4	6	n. s.	5	6	n. s.
22	ヤマカエラ	5	3	n. s.	5	4	n. s.
23	シジュウカラ	4	4	n. s.	4	4	n. s.
24	ツバメ	1	2	n. s.	2	2	n. s.
25	ヒヨドリ	13	12	n. s.	15	16	P<0.05
26	ウグイス	21	21	n. s.	21	21	n. s.
27	ヤブサメ	2	2	n. s.	2	2	n. s.
28	エナガ	2	5	n. s.	7	5	n. s.
29	オオムシクイ	8	6	n. s.	8	6	n. s.
30	エゾムシクイ	0	1	n. s.	0	1	n. s.
31	センダイムシクイ	2	3	n. s.	2	3	n. s.
32	メジロ	4	4	n. s.	7	8	n. s.
33	エゾセンユウ	0	1	n. s.	0	1	n. s.
34	オオヨシキリ	3	3	n. s.	3	3	n. s.
35	クロツグミ	7	4	n. s.	7	8	n. s.
36	コルリ	3	3	n. s.	3	3	n. s.
37	コサメビタキ	0	1	n. s.	0	1	n. s.
38	キビタキ	7	8	n. s.	7	8	P<0.05
39	オオルリ	2	2	n. s.	2	2	n. s.
40	ニュナイスズメ	2	3	n. s.	4	3	n. s.
41	スズメ	3	2	n. s.	3	3	n. s.
42	キセキレイ	1	2	n. s.	1	2	n. s.
43	カララヒワ	2	2	n. s.	2	2	P<0.05
44	ヘニマシコ	0	1	n. s.	0	1	n. s.
45	ウソ	0	1	n. s.	0	1	n. s.
46	イカル	9	9	n. s.	9	9	n. s.
47	ホオジロ	6	5	n. s.	6	5	n. s.
48	ノジコ	1	2	n. s.	1	3	P<0.05
	計	150	171	n. s.	174	189	P<0.05

※ n. s. 有意でないことを示す。例えば、P<0.05は有意であり調査結果に違いがあることをしめす。

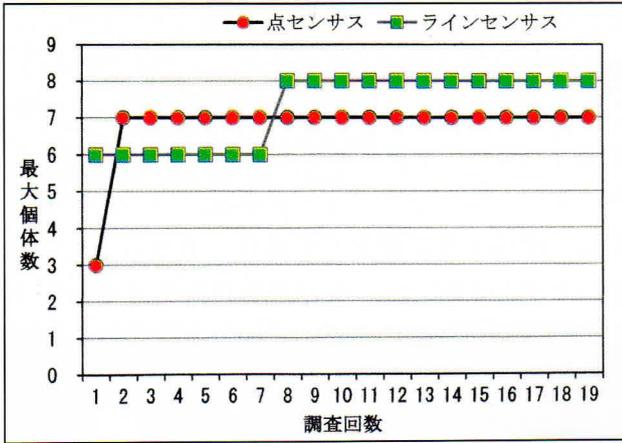


図5. キビタキの点センサスとラインセンサスによる各調査回数までの最大個体数



確認された鳥類 コガラ

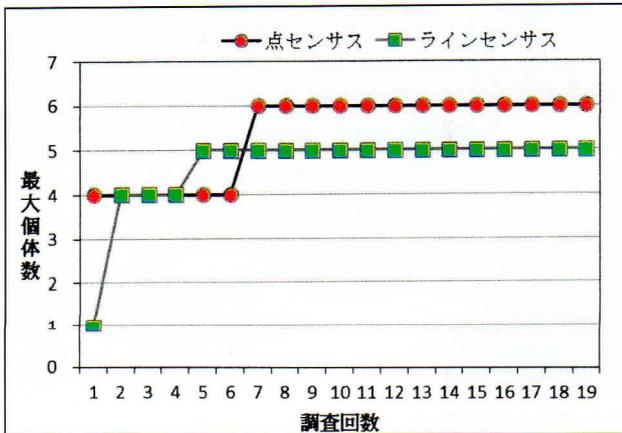


図6. ホオジロの点センサスとラインセンサスによる各調査回数までの最大個体数

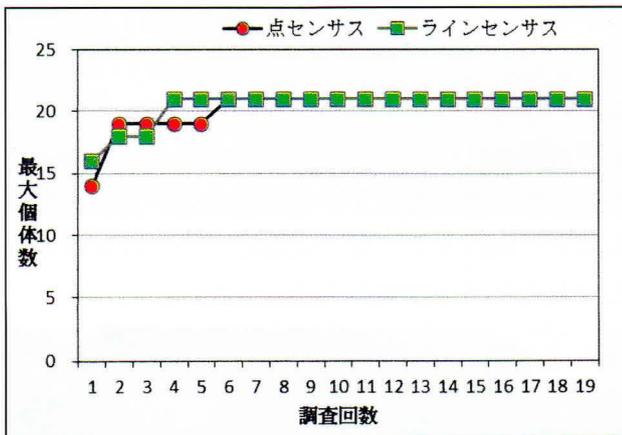


図7. ウグイスの点センサスとラインセンサスによる各調査回数までの最大個体数

ている。調査の1回目から19回目までの個体数を示している。

19回の実施した全調査の結果、48種が確認された(表1)。Migrant Breeder (小千谷市での区分以下同)39種(ホトトギス・ウグイス・キビタキ・イカルなど)、Passage Visitor 8種(ツツドリ・オオムシクイ・エゾムシクイ・センダイムシクイ・エゾセンニュウ・コルリ・コサメビタキ・ベニ

マシコ) Winter Visitor 1種(ウソ)であった。ラインセンサス法では40種、点センサス法では45種であった。点センサスとラインセンサスによる各調査回数までの全種の総計を見ると、ほぼ比例した数値となった(図4)。このことは、点センサスの方が、結果として少し個体数が多く観察されたが、基本的な調査データを得るにあたって、点センサスとラインセンサスの間に大きな差異はないことを示している。

次に19回の調査で確認された48種のWilcoxonの検定結果を見てみる。アオバト、ホトトギス、サシバ、ヒヨドリ、キビタキ、カワラヒワ、ノジコが有意($P < 0.05$)で、点センサスとラインセンサス法での差異がみられたが、他の41種は有意な違いはない。実際は、個々の種で個体数に差がみられるが、これは偶然の結果であると言える。

何回調査をおこなえばよいのだろうか。点センサスとラインセンサスによる各調査回数までの最大個体数では、ラインセンサス、点センサスとも調査の8回から10回目から個体数は余り増えなくなる。キビタキはラインセンサスの8回目(図5)、ホオジロは点センサスの7回目(図6)、ウグイスは8回目(図7)で点センサスとラインセンサスで同じことになった。このことからそれぞれ8回程度調査をおこなえばよいと考えられる。

謝辞

調査解析に当たり、小池重人氏より御教示いただいた。お礼申しあげる。

メジロの子育てとヒナの成長

小池重人(研究部)

木々が新緑から濃い緑に変わり、地上の草が膝近くまで伸びる頃、林を歩いていると時々草むらや木の茂みから小鳥が突然飛び出すことがある。時々そこには巣があり、抱卵されている卵がある。アオジやホオジロの場合が多いのだが、今年はメジロの巣を発見できたので、写真とビデオ撮影で子育てを観察を行った。

2014年6月4日、新潟市の海岸防砂林を歩いているとメジロが逃げるように飛んだ。翌日の5日も前日と同じ場所でメジロが飛んだので、探したらウワミズザクラの枝先に枯れ草やビニール紐で作られた巣があった(図1)。巣の高さは1.6~1.7mで低かった。下からは見えるが、上からは巣があることがよくわからない。そこには4個の青い卵があった(図2)。



図1. ウワミズザクラの枝先に作られたメジロの巣。



図2. メジロの巣と青い卵。

6月7日、巣から2mまで近づいても親は巣から逃げない。1mまで近づくと、親は巣から飛び出

した。卵はすでに孵化しており、羽毛の生えていないヒナが4羽いた。翼の羽毛が生える部分が少し黒くなっていたことから、2日前の5日の午後に孵化したと考えられた(図3)。そこで、孵化日を6月5日とした。

6月9日、2mまで近づくと親は巣から出て斜め



図3. 孵化2日後のヒナ。

下に飛び、地上近くの枯れ木にとまり、そこから上空へと逃げた。最初から巣の上部には逃げないことがわかった。この動きはカラスなどの外敵から巣の場所を察知されないための行動であろう。ヒナの成長は早く翼と背中中の羽毛が生える部分がかなり黒っぽくなっていた(図4)。10m程度離れると、親はすぐに巣に戻った。人に対する警戒心はあまり強くないようであった。



図4. 孵化4日後のヒナ。

6月10日の朝にビデオ撮影した。巣から3m離

してカメラを木の葉で覆い、無人撮影した。ビデオ記録から親はカメラを全く気にしていないことがわかった。巣では、片方の親が餌を持って来るともう片方の抱雛していた親は巣から離れ、餌を持ってきた親が抱雛するという繰り返りであった(図5)。時には2羽一緒に巣の縁に止まりしばらく留まることもあった。



図5. ヒナを抱くメジロの親。ヒナの嘴が見える。

撮影した75分で10回給餌した。餌はガの幼虫(青虫)が多く4回(図6)、クモ3回、不明4回であった。ふつう1匹ずつくわえてくるが稀に2匹くわえてくることもあった。ヒナの糞は食べていた。



図6. ガの幼虫(青虫)を給餌。

6月11日、ヒナはかなり大きく成長しており、背や翼の羽毛が針状に伸びていた(図7)。



図7. 孵化6日後のヒナ。

6月13日、ヒナはすでにメジロ本来の黄緑色の羽毛に覆われつつあった(図8)。8日後だというのに成長の早さに驚いた。



図8. 孵化8日後のヒナ。

6月15日の朝にビデオ撮影した。ヒナは全身羽毛で覆われており、盛んに羽づくろいしていた。親は75分で16回給餌した。給餌後すぐに巣から離れることもあれば、しばらく留まりヒナの羽づくろいを手伝うこともあった(図9)。またこんなに大きくなってもヒナを抱く行動も見られた。給餌後糞は外へ運び去った。



図9. 孵化10日後のヒナと羽づくろいを手伝う親。

その日の11時頃に異常な枝の振動に驚き4羽のヒナは飛び出し巣立った。カラスが来たのかもしれない。

それにしてもふ化10日後での巣立は早い。メジロ自体が小さいために成長が早いのだろうか。シジュウカラやコムドリでは2週間以上はかかる。それとも、これらの樹洞営巣性の鳥よりも敵から見つけやすい場所に巣を作るメジロは、一刻も早く巣立ちできるように成長が早いのだろうか。そのために、卵を少なく産んで1羽あたりに餌を多く与え、早く成長できるようにしているのだろうか。なかなか難しい問題である。

鳥屋野潟におけるトラフズクの繁殖状況

新潟市 岡田成弘・高橋 泉

はじめに

新潟市中央区の鳥屋野潟には隣接する二つの鳥屋野潟公園（女池地区、鐘木地区）がある。2005年に女池地区の鳥屋野潟公園でトラフズク（*Asio otus*）の繁殖を発見し1）、2007年には鐘木地区の鳥屋野潟公園でも繁殖を確認した2）。その後もそれぞれの公園でトラフズクの繁殖を確認している。本報告では2005年から2014年までの10年間の鳥屋野潟公園における繁殖状況について報告する。尚、女池地区は高橋、鐘木地区は岡田が主に調査を行った。

調査地域

鳥屋野潟公園（女池地区、鐘木地区）及び鳥屋野潟と周辺地域（図1）

調査結果

1. 女池地区及び鐘木地区の鳥屋野潟公園における繁殖状況を表1にまとめた。女池地区では2005年から2014年までの10年間で8回、鐘木地区では2007年から2014年までの8年間で5回の巣立ちヒナを確認した（図2、3、4）。
2. 女池地区の営巣木は毎年同一ではないものの同じ林の中に隣接するマツの木であった。鐘木地区の5回もいずれもマツの木であったが異なる営巣木であり、距離も離れていた。
3. 親鳥による給餌の観察からネズミ類、コウモ



図2 女池地区の公園の松林で繁殖(2008年5月21日)

り類（図5）、鳥類、昆虫類などを確認した。また巣立ち後の幼鳥の観察から、昆虫類の捕食や、ヨシ原の低木に止まり地面に降りて餌を獲る行動を確認した。

まとめと考察

1. 2005年から2014年までの10年間、鳥屋野潟公園（一方もしくは両方）でトラフズクの繁殖を毎年確認した。
2. 営巣木は抱卵または巣の中にヒナがいることを確認して特定できたものと巣立ちヒナの発見場所から推定したものがあがるが、いずれもマツ（アカマツもしくはクロマツ）であった。巣はそれぞれの直径が50 cm前後と推定され、巣材には枝のほかにネットなどのプラスチック類が見られるものがあつた。2007年に鐘木地区で繁殖した巣は

表1 鳥屋野潟公園におけるトラフズクの繁殖状況

年	女池地区	鐘木地区
2005	3羽巣立ち	(未調査)
2006	5羽巣立ち	(未調査)
2007	3羽巣立ち	3羽巣立ち
2008	3羽巣立ち	3羽巣立ち(内1羽保護、1羽死亡)
2009	3羽巣立ち(内1羽保護)	繁殖確認できず
2010	繁殖確認できず	2羽巣立ち(内1羽死体確認)
2011	繁殖確認できず	2羽巣立ち、その後1羽のみ確認
2012	3羽巣立ち	繁殖確認できず
2013	3羽巣立ち	1羽保護
2014	3羽巣立ち	4羽巣立ち



図3 クロマツのからすの古巣で営巣
(鐘木地区 2007年4月23日)



図4 巣の中のヒナ (鐘木地区、2007年5月)



図4 巣の中のヒナ (鐘木地区、2007年5月)

前年2006年にカラスが繁殖した巣であった。これらのことから繁殖に使用した巣はいずれも同公園で前年以前に営巣・繁殖したカラス類の古巣であると考えられる。

3. 採餌及び捕食行動の観察、ペリットの分析結果から同公園及び鳥屋野潟を広く餌場として利用し、特定の種類に限らずに捕えることのできる餌資源を広く利用しているものと考えられる。尚、佐藤(2014)により同公園で採集したトラフズクのペリットの分析結果から、ハタネズミ、イエコウモリ、ハツカネズミなどの小型哺乳類が餌動物の優先種であり、渡り途中の小鳥類を含む鳥類の出現頻度も高いことが詳細に報告されている(3)。

30年ほど前に造成された鳥屋野潟公園では植樹された種々の樹木が生長して大きな森となっている。この森をカラスが営巣場所として利用し、その古巣を利用してトラフズクが繁殖していることが確認された。これまで県内では主に農耕地を生息場所とし、社寺林や屋敷林で繁殖していることが知られていたが、都市の中心部の公園で繁殖していることからトラフズクの適応力の高さを知ることができた。また生態系の上位に位置するトラフズクが毎年繁殖していることから鳥屋野潟の多様で豊かな自然を伺い知ることができた。

謝辞

本調査にあたり、本田貞夫、本田茂夫、村上真由美、佐藤悠子の各氏には調査にご協力いただくとともに貴重な情報をご提供いただいた。厚く御礼を申し上げる。

引用文献

- 1) 高橋 泉 鳥屋野潟公園のトラフズク
新潟県自然観察指導員の会通信 No.18 (2005年7月)、No.24 (2006年8月)、No.35 (2008年9月)
- 2) 岡田 成弘 新潟市鳥屋野潟公園で繁殖したトラフズク(短報)日本野鳥の会新潟県支部報 No.64 (2007年10月)
- 3) 佐藤 悠子 鳥屋野潟に生息するトラフズクのペリット分析 日本野鳥の会新潟県会報 No.77 (2014年3月)



ブッポウソウ

撮影日時：2014年6月19日
 撮影者：織田康平
 報告者：佐藤裕子

市街地でブッポウソウを観察しました。15年間の「鳥屋野湯、清五郎湯調査」では恐らく初記録と聞いています。



マナヅル

発見者、及び発見日 南雲敏夫 2014年10月16日（尚12日頃に狝友会が確認していたらしいです。）
 撮影 南雲敏夫

河川敷を車で移動中に発見、最初はあれっと思いまさかと思いましたが、すぐに撮影して調べたらマナヅルでした。思いがけずの出来事でやはり周囲は良く見るもんだとつくづく思った次第です。



レンカク

撮影日時：2014年8月9日（土）午前11時ころ
 撮影場所：上越市大潟区朝日池
 撮影者：曾我茂樹

朝日池にて2014年7月20日、長野市の田中敬三夫妻が初認し、9月7日の終認まで長期間鳥好き達を楽しませてくれました。

総会と阿賀町赤崎山探鳥会

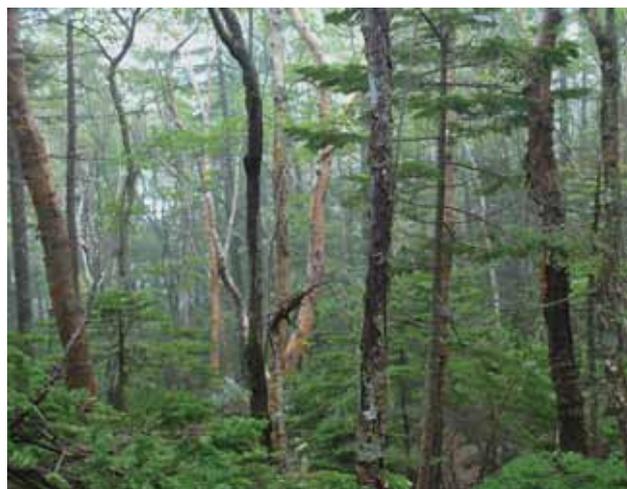
(2014.5.31 ~ 6.1)

眼下に広がる雲海を眺めての早朝探鳥会は、心洗われるものでした。(アオバト他 34 種)



中部ブロック会議参加報告 事務局

今年度の中部ブロック（中部地方10県、20支部・連携団体）会議は6月7日、8日に静岡県小山町須走すばしりのコミュニティーセンターで64名が出席して開催されました。須走は日本野鳥の会創設者の中西悟堂氏らによって日本で初めて探鳥会が開催された場所です。渡辺修治氏による富士山の野鳥についての講演、元東京支部長の西村眞一氏による中西悟堂氏についての講演があり、続いて日本野鳥の会及び連携団体からの各連絡及び討



議事項について意見交換を行いました。2日目は須走で早朝探鳥会が行われました。新緑の富士山を望みながら初夏の森にさえずるヒタキ類やカラ類を観察し、世界遺産に登録されている浅間神社では日本野鳥の会新潟県探鳥会開催記念の碑を見学しました。朝食後はバスで富士山五合目まで移動し、須走登山道を小富士まで観察しながら往復しました。ダケカンバやオオシラビソの亜高山帯の森にさえずるビンズイ、ルリビタキ、メボソムシクイ、ミソサイザイなどを観察することができました。各支部・連携団体と交流を深めることができ、大変有意義な二日間でした。

（文責 本間由紀子）



発行	2014年10月30日	No.78
発行人	石部 久	編集者 小林成光、千葉 晃
事務局	日本野鳥の会新潟県 〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号 TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉 00610-1-6002	